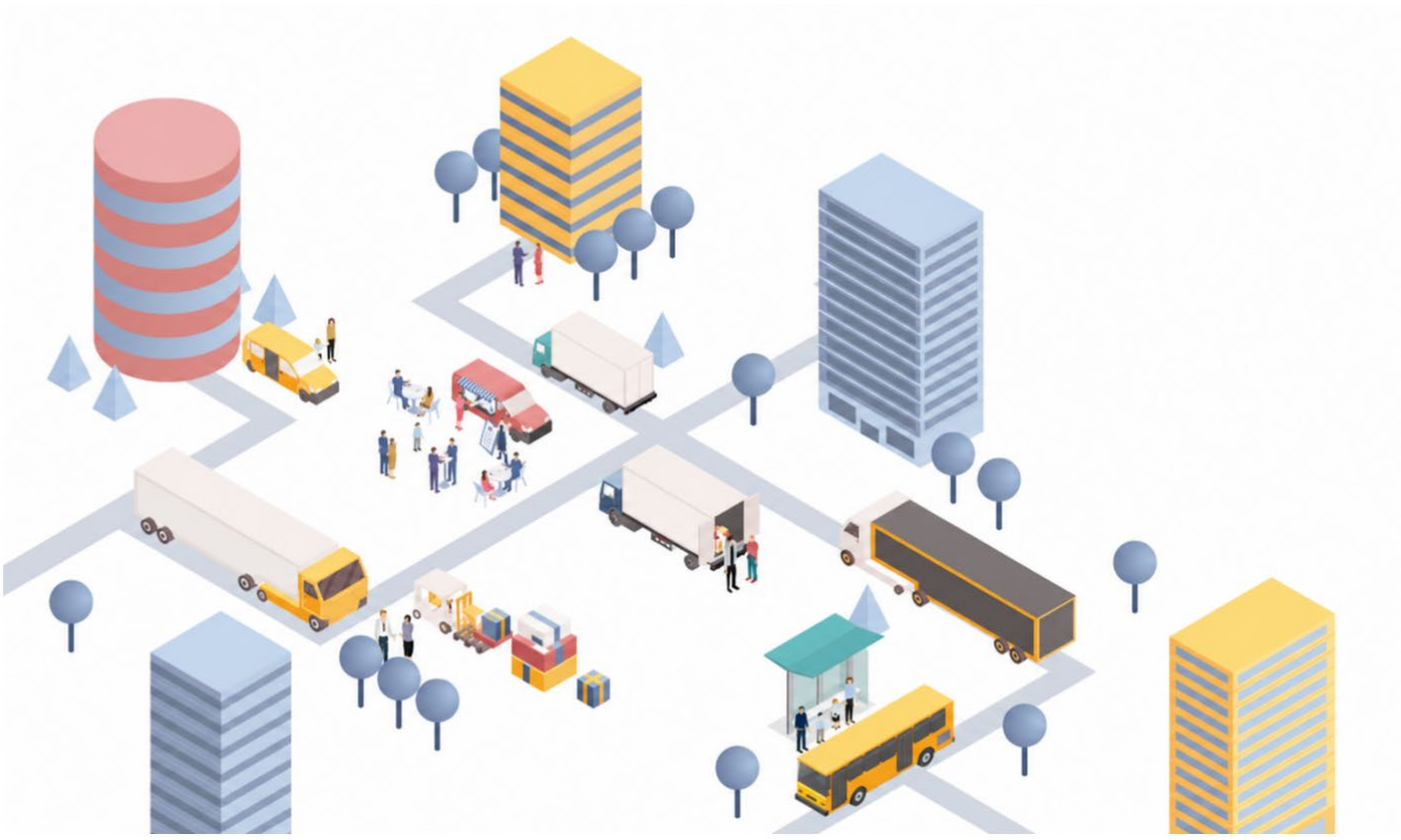
ISUZU

ISUZU LOGISTICS Co., Ltd.
Sustainability Activities



2024

ISUZU GROUP

気候変動対策

ISUZU LOGISTICS

物流過程におけるCO_2排出量の低減

いすゞロジスティクスでは、物流過程におけるCO_2排出量を毎年1%低減することを目標に掲げ、CO_2排出量の低減の取り組みを実施しています。

<主な取り組み>

・輸送方法の見直し

・搬送時の省燃費運転促進

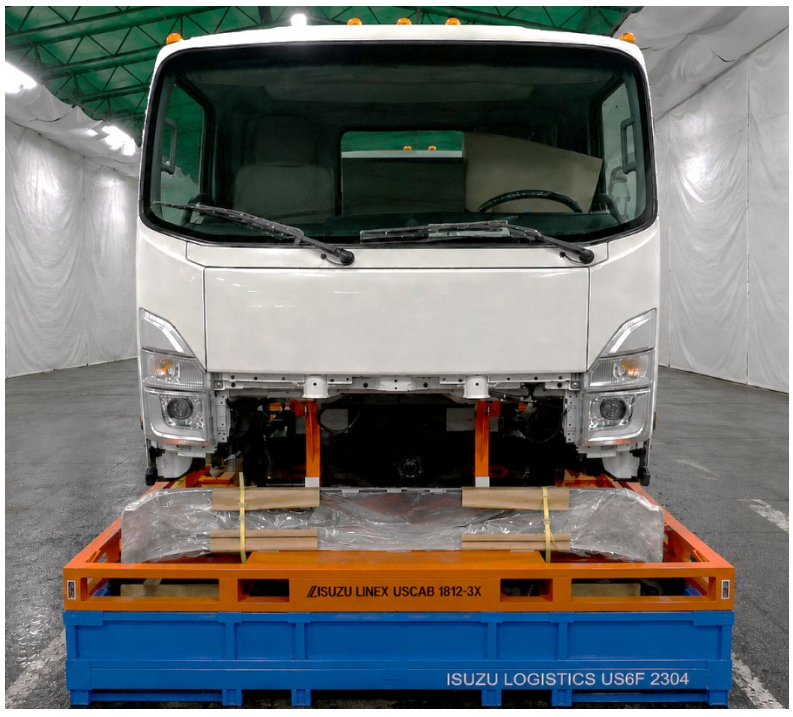
・新規航路開拓による海上輸送の増便（モーダルシフト）

・荷量に合わせたトラック輸送管理の徹底

・返却時に折り畳めるリターナブルラックの使用拡大

・トレーラー輸送の拡大とコンテナ内貨物充填率向上

・コンテナラウンドユースの拡大



キャブ用リターナブルラック（オレンジ）
＋ 部品用リターナブルラック（ブルー）



折り畳まれたリターナブルラック

ISUZU LOGISTICS

輸送方法の見直し

いすゞロジスティクスは、2020年に栃木工場の近接地へ新しい海外出荷拠点である「グローバルセンター」を新設しました。同時に栃木地区の拠点再配置を実施し、外部倉庫の集約で倉庫間輸送が削減され、輸送効率が大幅に向上しました。また、従来は隣接したパーツセンターの部品輸送にトラックを使用していましたが、倉庫間に高架橋を設置することで、新しい物流導線を作りました。従来のトラック輸送から無人けん引車へ輸送方法を切り替えることで、トラックで使用していた燃料を減らすとともにCO_2排出量を削減しました。

また、いすゞロジスティクスでは常に製品、部品の輸送ルートの見直し、最適化を進めており、グループ間の共同運送などを行うことで、輸送に伴うCO_2排出量削減に取り組んでいます。



倉庫間に設置された高架橋



倉庫間の輸送を無人けん引車で実施

気候変動対策

ISUZU LOGISTICS

コンテナラウンドユースの拡大

いすゞロジスティクスでは物流分野全体でカーボンニュートラル活動を実施しており、最近では輸入で使用したコンテナの荷降ろし後、空になったコンテナを輸出用コンテナとして再利用するコンテナラウンドユース（CRU）に取り組んでいます。

従前、栃木工場で梱包されるノックダウン（KD）部品の輸出用空コンテナを横浜港まで引き取りに行っていましたが、現在では船社が指定する栃木工場近隣の内陸エリアのデポで他社が荷降ろしした輸入用コンテナを引き取り、栃木工場にてKD部品の輸出用コンテナとして再利用しています。また、藤沢エリアでは他社との協業により、荷降ろし後の空コンテナを横浜港へ戻さず、藤沢工場近隣のいすゞグループ倉庫へ持っていき、KD部品の輸出用に再利用するCRUを実施しています。この活動により安定的な物流の確保が可能になり、輸送時の使用燃料を削減したことで、CO_2排出量の削減につながりました。





CRU KD出荷コンテナ内外

気候変動対策

ISUZU LOGISTICS

バイオマス資材の導入

いすゞロジスティクスでは海外組立工場向けノックダウン（KD）出荷の包装資材にサトウキビ由来のバイオ原料を配合したバイオマス資材を導入しています。このバイオマス資材の主原料はサトウキビで、成長の過程において光合成によりCO_2を吸収するため、廃棄焼却時はCO_2が相殺されるとみなされます。

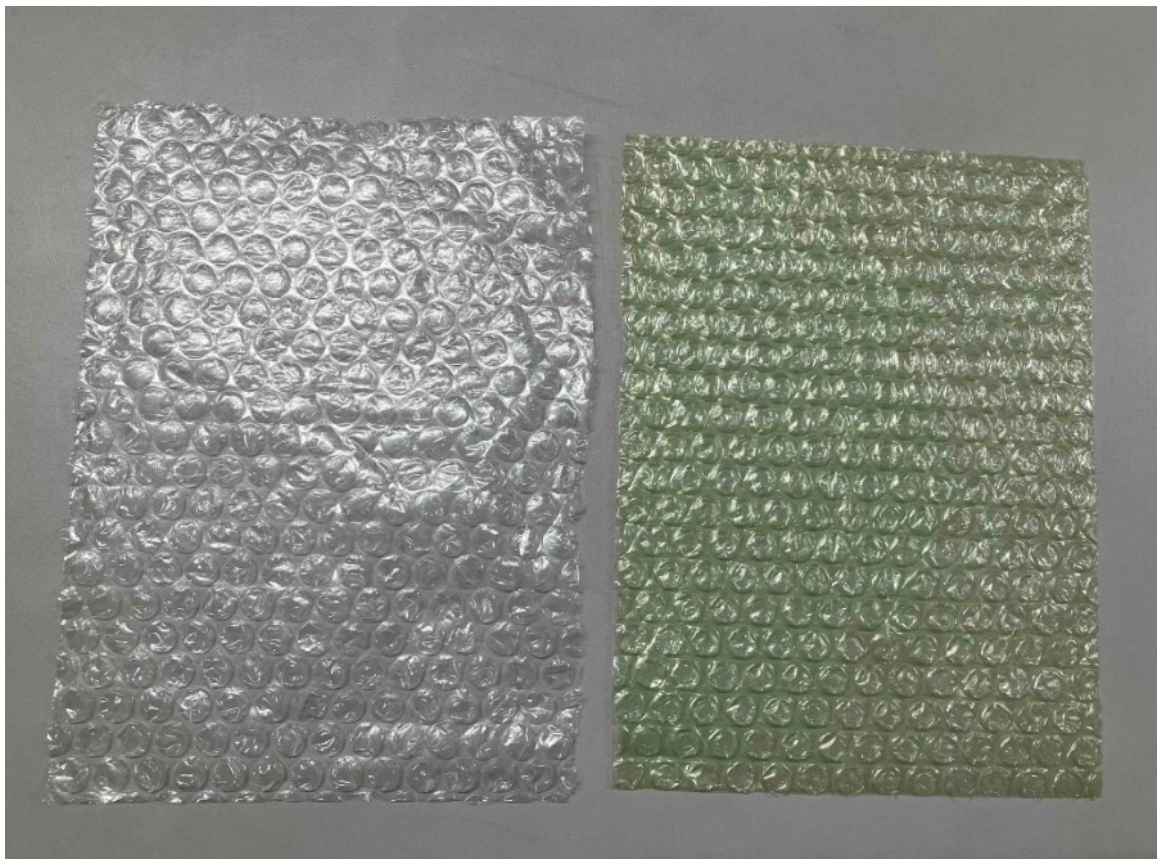
2017年度から、年間約900万枚と最も多く使用されるA4サイズのポリ袋を石化由来のものからバイオマス資材へ切り替え、CO_2排出量を約7%削減しました。その後、他のサイズのポリ袋にも展開し、2023年度には、全10サイズのポリ袋をバイオマス資材へ切り替えています。

気泡緩衝材についても2022年度から全16サイズについてバイオ原料を約15%配合したバイオマス資材へ切り替え、CO_2排出量を約5%削減しています。これらの取り組みにより、約120t/年のCO_2排出量を削減しています。

今後も引き続き、石油由来の包装資材から植物由来の包装資材への切り換えを推進し、包装資材のライフサイクル全体で温室効果ガス(GHG)ゼロを目指します。



バイオマスポリ袋に入った部品



バイオマス気泡緩衝材
（左は従来の石油由来プラ製品、右がバイオプラ製品）

資源循環推進

梱包・包装資材の削減：リターナブルラックの導入拡大

いすゞロジスティクスでは、物流全体における環境負荷を低減する活動の一環として、グループ内で行う梱包出荷から海外工場における廃棄までを考慮した、環境負荷の少ない梱包資材の導入拡大を推進しています。中でも繰り返し利用可能な全仕向地共通のリターナブルラックの導入は2017年から推進しており、国内外の工場間部品輸送などに順次展開・拡大しています。リターナブルラックの導入拡大により、海外の組立工場で廃材となっていた、ノックダウン（KD）部品の梱包用ワンウェイラックの使用を削減することができました。従来は木製でワンウェイであったキャブ用ラックは2021年度から鉄製のリターナブルラックへ変更しました。廃棄時の釘抜き等の木材解体作業も不要となり、作業時の安全性も向上しています。

2019年度は、単体重量が従来比33%減の軽量型リターナブルラックやコンテナ内の充填率を上げるための高さ違いの2種類のラックも開発し、2023年度には主要仕向国への展開が完了しました。

また、完成キャブをコンテナに積載する際に発生する上部空間を活用するため、キャブ用ラックの下に入る部品用リターナブルラックを開発しました。これにより、段積みによるコンテナ内充填率が向上しました。アクスル等の大物部品や他のコンテナを使用して出荷していた部品をこの部品用リターナブルラックに搭載することにより、40ftコンテナを年間約300本分削減でき、省資源化のみならず、輸送における温室効果ガス（GHG）の低減にもつながっています。



リターナブルラック



キャブ用ラック（オレンジ）
＋部品用ラック（ブルー）

生物多様性保全

ISUZU LOGISTICS

生物多様性保全活動を推進

いすゞロジスティクスでは、いすゞ藤沢工場において近隣大学と協働で実施されている生物多様性保全活動に、2023年度より多くのメンバーが継続して参加しています。

いすゞ藤沢工場では、2013年から工場敷地内の動植物の調査を実施し、その結果、林地の手入れ不足により、生態系の偏りや外来種の繁茂が見られ、里山としての公益的機能が弱まっていることがわかりました。これを受け、大学からの助言をもとに、2016年度から在来種が生育するエリアを「エコアップエリア」に指定し、環境整備を進めています。2017年以降の継続的な調査では、外来種の減少や生態系の偏りの改善傾向が確認されています。

また、いすゞ藤沢工場内のエコアップエリアには、在来種である「ツルボ」や「シロヨメナ」が群生しています。工場敷地内でこのような群生が見られることは大変珍しいことから、群生地の生育環境の改善を進めています。いすゞロジスティクスでは、こうした活動への参画に加え、2023年度から、いすゞ藤沢工場内に自生するツルボ・シロヨメナを譲り受け、プランターに植え替えて自社で育成する取り組みも進めています。

今後も、いすゞグループの一員として地域の生態系に配慮した活動を推進し、生物多様性の保全に貢献していきます。



いすゞ藤沢工場 エコアップ活動



いすゞ藤沢工場 ツルボエリア



ツルボの植え替え

地球の「運ぶ」を創造する

ISUZU

ISUZU GROUP